



Title	自然を感じてつながろう : 大阪大学吹田キャンパスでのネイチュア・フィーリング自然「感」察会
Author(s)	佐伯, いく代; 中井, 好男; 石田, 唯 他
Citation	未来共創. 2026, 13, p. 63-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106425
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自然を感じてつながろう

大阪大学吹田キャンパスでのネイチュア・フィーリング自然「感」察会

佐伯 いく代¹

中井 好男¹

石田 唯¹

塚本 薫平¹

坂口 真康¹

モハーチ ゲルゲイ¹

徳永 恵美香²

Mariam Likokeli¹

徐 朶朶¹

1) 大阪大学大学院 人間科学研究科 2) 大阪大学大学院 人間科学研究科 未来共創センター

要旨

ネイチュア・フィーリングとは、五感を使った自然観察会のことである。本稿では、大阪大学吹田キャンパスにて二度にわたって開催されたネイチュア・フィーリング自然「感」察会について紹介する。ここで、自然観察ではなく自然「感」察としたのは、多様な自然の感じ方を尊重するネイチュア・フィーリングの理念を表現したいと考えたためである。一回目は2024年11月に実施され、本学の学生・教員のほか、視覚と聴覚の双方に障害のある人々（盲ろう者）や自然観察指導員らが参加した。雨天のため室内での開催となったが、参加者は植物の葉に触れたり、においを嗅いだりして思い思いに自然「感」察を楽しんだ。二回目は2025年11月に開催し、キャンパスにあるコミュニティー・ガーデンにて自然散策などを行った。参加した学生の感想や盲ろう者へのインタビューの結果から、ネイチュア・フィーリングは包摂的な実践にとどまらず、自然との共有体験を通して人々の絆を深めるための有効なアプローチであることが示された。

saeki.hus@osaka-u.ac.jp（佐伯）

1. ネイチャ・フィーリングとは

ネイチャ・フィーリングとは、五感を使って自然を感じる自然観察会のことである(日本自然保護協会 2021)。五感は、「見る」「聞く」「触れる」「嗅ぐ」「味わう」を意味しており、全ての感覚をもつ人の場合、「見る」ことで約8割の情報を認識しているといわれている(阿部 1988)。確かに人は視覚によって、空、水、土、動物、植物といった自然物の色や形、模様などを認識することができる。しかし、鳥のさえずりや虫の鳴き声を知覚するには聴覚が必要である。また植物の葉や動物の体表面は、種によって手触りが大きく異なり、しばしばそれが識別のヒントとして利用される。もちろん、トゲや毒をもつ生き物は、むやみに触れてはならないが、接触後に起こる痛みや痒みなどは触覚に付随する感覚ともいえる。なおについては花の芳香が思い浮かぶが、昆虫が捕食者から逃避したり異性を引き寄せたりする物質などにもおいを放つものがある。味覚にいたっては、甘味・酸味・苦味・辛味など、食に通ずる感覚であることは言うまでもない。五感を使って自然を感じることは、自然に対する認識を深め、人と自然との関係性を実体験に基づいて豊かにする。言い換えれば、ネイチャ・フィーリングは、様々な感覚を積極的に使うことで、自然の面白さや奥深さを楽しむための手法である。

ネイチャ・フィーリングは、目の不自由な子どもたちの理科教育を端緒として始まった。具体的には、東京教育大学(現筑波大学)附属盲学校の教員であった青柳昌宏氏(1934-1998)が創設した自然保護教育の手法である(日本自然保護協会 2021)。青柳氏は、東京教育大学の農学部と理学部において昆虫学と動物生態学を学び、和歌山県での教員生活を経て東京教育大学附属盲学校に赴任した。同氏は南極観測隊に参加してペンギンの生態研究に携ったこともあるほどの生粋のナチュラリストである(内田 2023)。その一方で、自然保護教育をライフワークとし、一般社団法人日本自然保護協会の自然観察指導員制度を創設したことで知られている。青柳氏が盲学校時代に開発した、触って学ぶ生物学の授業方法は、五感を使って感じる自然体験「ネイチャ・フィーリング」として発展し、現在、自然観察指導員の研修会や大学での授業などにおいて実践されている。青柳氏とともに、ネイチャ・フィーリ

ングの発展に寄与した鳥山由子氏（元筑波大学盲学校教員）は、ある日、目の不自由な中学生たちがタンポポの茎をふれていた際、これは咲き終わったものか、まだつぼみのものか、という質問を受けた。鳥山氏がタンポポを見ながら、これは咲き終わったもの、こちらはつぼみ、などと伝えていると、生徒は、つぼみと咲き終わったものとで茎の太さが異なっており、触れることでそれを識別できることを見出した。これは、タンポポを目で見ることのできる晴眼者では気づくことの難しい大きな発見であり、とぎすまされた触覚で自然を丁寧に感じ取ろうとしていたことが、タンポポという植物をより深く知ることにつながった事例である（鳥山 2007）。

私たちは今、テレビやインターネットを通じ、直接触れることなく自然に関する情報を得ることができる。それにもかかわらず、五感で自然をとらえ、実体験として自然と向き合うことの意味は何であろうか。とりわけこの手法では、「感じる」ことを重要視し、解説による知識の伝達を最小限とすることが特色である。米国の海洋生物学者レイチェル・カーソンの著作である『センス・オブ・ワンダー（The Sence of Wonder）』（1956=1996）には、「知ることは、感じることの半分も重要ではない（It is not half so important to know as to feel.）」という言葉がある。レイチェル・カーソンは、米国で1960年代に環境問題を告発した研究者であり、『沈黙の春（Silent Spring）』（1962=1974）などの出版を通じ、人々に自然環境の保全の重要性について広く伝える活動を行った。彼女は、人が自然を大切にする意欲をもつには、実際に自然に触れてその美しさに感動したり、実物に触れたりすることが不可欠であると述べている。この主張は支持を集め、現在、自然体験型の環境教育や幼児教育などの分野に活かされている。

先に述べたように、ネイチャ・フィーリングの創設は、視覚に障害のある子ども達への自然教育がきっかけであった。視覚や聴覚などに障害のある人と一緒に自然体験を行うと、障害がない人であっても、普段、あまり利用しない感覚が磨かれ、深い観察や驚きにつながると考えられる。だが、ネイチャ・フィーリングは、必ずしも障害者との自然体験だけを意味するものではない。ネイチャ・フィーリングのキャッチフレーズは、「いつでも・どこでも・誰とでも」（自然保護協会 2021）。多様な人々がそれぞれの感じ方を共有する

ことで、より豊かな自然体験が可能となり、自然と人、人と人とのつながりを深める場となることが期待される。

著者の一人である佐伯は、東京都にある新宿御苑で定期的に開かれているネイチュア・フィーリング（主催：ネイチュア・フィーリングをすすめる会）に参加をしたことがある。新宿御苑は、都心にあるとは思えないほど広大な緑地が広がっており、2時間程度のイベントであったが、森や水辺など様々な自然とのふれあいを楽しむことができた。そこでは、誰でも自由な感覚で自然を楽しむ時間が共有されており、杖をついて歩いている人や、視覚に障害のある人なども楽しそうに参加をしていた。実際、ネイチュア・フィーリングは障害のある人だけではなく、子どもやお年寄も、生きものに詳しい人もそうでない人も、誰もが自分らしく自然にふれることができる手法として広まっている。「何気ない自然観察会のなかに、たまたま来ていた」「気がついたら、障害者もいた」（日本自然保護協会 2021）。これは創設者の青柳氏が述べた世界観である。障害者やマイノリティーの「ために (for)」ではなく、誰もが「共に (with)」というコンセプトが、ネイチュア・フィーリングの真髄である。

著者らは、2024年および2025年の秋、二度にわたり大阪大学吹田キャンパスにてネイチュア・フィーリング自然「感」察会を実施した。ここで、自然観察ではなく自然「感」察としたのは、多様な自然の感じ方を尊重するネイチュア・フィーリングの理念を表現したいと考えたためである。この会には、大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科の学生や教員のほか、大阪市天王寺区に拠点をおくNPO法人ヘレンケラー自立支援センターすまいる（以下、すまいる）に所属する盲ろう者の方にも参加をいただいた。また企画の際には、日本自然保護協会自然観察指導員大阪連絡会に助言をいただき、開催当日にも関係者に参加をいただいた。本稿では、ネイチュア・フィーリング自然「感」察会の様子や参加者の声などを紹介し、今後の展望について議論したい。

2. 大阪大学吹田キャンパスでのネイチュア・フィーリング自然「感」察会

第1回目のネイチュア・フィーリングは、2024年11月26日（火）に実施し

た(図1)。この日はあいにく雨であったため、全てのプログラムを大阪大学吹田キャンパス人間科学部棟1階のインターナショナルカフェにて行った。まず、参加者が自己紹介を行った。参加者は、本学の学生と教員、すまいるの関係者、日本自然保護協会自然観察指導員(以下、自然観察指導員)、事前に申し込みのあった学外者などを含め、全体で約50名であった。視覚や聴覚に障害のある参加者14名にはそれぞれ介助者が付き添って逐次通訳が行われた。また、会場に手話通訳者が3名配置され、聴覚に障害のある参加者や介助者がそれを見てコミュニケーションをはかることができるようにした。大阪大学の学生や教員には、初歩的な手話を使って自己紹介を行う者がいた。大阪大学では、著者の一人である中井が中心となり、「手話カフェ」が開催されている。これに参加し、手話を勉強する学生の参加もあった。当日行った自然体験は、植物の葉や実を使うものが中心であった(表1a)。「感」察の対象とした植物は人間科学部棟周辺から採集し、参加者にとってできるだけ身近な素材となるようこころがけた。クスノキは植物全体に樟脳を含むため、ちぎると独特の香りがある。またクスノキの葉にはダニの生息する小さな空間(通称ダニ部屋)があるので、葉に指で触れダニ部屋のふくらみを探すプログラムも実施した(図2)。イチョウは大阪大学のシンボルでもある重要な植物である。そこで次の二つのプログラムに盛り込んだ。一つ目は生葉と落ち葉の温度の違いを感じるもの、二つ目は封筒の中にイチョウを含む何種類かの葉を入れておき、手触りで違いを感じとるものである。さらに、葉を入れたものとは別の封筒を配り、その中には、ウバメガシ(どんぐり)、アキグミの実、クスノキの実を数個ずつ入れて、何種類の実があるか考えるクイズを行った。「せーの!」という掛け声とともに一斉に指で数を示してもらうと、正解とは異なる数字を示す参加者が続出し、会場は笑いに包まれた。アキグミの実を食べることができるが、酸味が強いのが特徴である。自己責任ということで口に入れた参加者が、あまりの酸っぱさに顔をしかめる一幕もあった。最後は、同じテーブルに座った参加者同士がチームとなり、小石とできるだけ同じ重さになるようどんぐりを紙コップに入れるゲームを行った。これは、手から感じ取る重さの感覚のみが頼りであり、各自が意見を出し合いながら、どんぐりを入れたり取り出したりして重さを調整する光景がみられた。チームの意見がま



図1 第1回ネイチャ・フィーリングの様子。大阪大学人間科学部棟
インターナショナルカフェにて。撮影者：石田唯。



図2 クスノキの葉に触れる。撮影者：石田唯。



図3 第2回ネイチャ・フィーリングの様子。大阪大学吹田キャンパスにあるコミュニティ・ガーデンにて。撮影者：Mariam Likokeli。

とまったら、どんぐりの入った紙コップと小石とを携帯型の重量計ではかり、最も差の小さかったチームを優勝とした。優勝チームにはメダルが授与され、参加者は、聴者による「手を叩く」拍手と、ろう者による「両手を上げひらひらと動かす」拍手のそれぞれで、優勝したチームを讃えた。

2回目は、2025年11月11日に開催した。この日は晴天に恵まれた。参加者は、本学の教員と学生、すまいるに所属する盲ろう者と介助者、自然観察指導員、事前に申し込みのあった学外者など約50名であった。インターナショナルカフェでの自己紹介のあと、クスノキや香りのある植物を使った室内でのネイチャ・フィーリングを行い、人間科学部棟の脇にあるコミュニティ・ガーデンに移動するプログラムとした（表2b）。このコミュニティ・ガーデンは、2022に著者の一人であるモハーチと、同じ研究室に所属する太田貴大准教授がたちあげた中庭である（本特集参照）。コミュニティ・ガーデンでは、設置の目的や経緯などについて、モハーチから紹介がなされたあと、小グループにわかれて、ビオトープやミミズコンポスト、袋の中の植物の種数をあてるクイズなどを楽しんだ（図3）。コミュニティ・ガーデンでは、決まったプログラムを全員が順序だてて体験したわけではなく、おのおのが植物の葉に

触れたり、指導観察指導員や学外からの参加者らと交流したりするなどして、自由な時間を過ごした。その後、室内に戻り、第1回と同様、どんぐりの重さをあてるゲームを行って終了した。第1回、第2回ともに、プログラムは、ネイチュア・フィーリングのテキスト(日本自然保護協会 2021)や、ネイチュア・フィーリングの開催実績をもつ日本自然保護協会自然観察指導員大阪連絡会の助言をもとに企画された。

表1 大阪大学吹田キャンパスで開催されたネイチュア・フィーリング自然「感」察会の概要。

a. 第1回 (2024年11月26日開催)

プログラム ¹⁾	内容
1. クスノキの葉をさわってみよう	・三行脈の基部のふくらみを指で感じ、そこにダニがいることを想像する。 ・葉をちぎり樟脳の香りを嗅ぐ。
2. イチョウの落ち葉と生葉の違いは？	・枝についた生葉と、野外で採集した落ち葉に指で触れ、違いをみつける。生葉は水分を含むためやや冷たく感じるか確認する。
3. 袋の中には何種類の葉があるでしょう？	・A4サイズの封筒に、ケヤキ、イチョウ、ソメイヨシノの葉をそれぞれ2～3枚ずつ入れておき、中を見ずに手で触れた感覚だけで何種類の植物があるかをあてる。ケヤキの葉はざらざらしているが、イチョウの葉は葉脈が基部から葉縁に向かって伸びていること、ソメイヨシノの葉柄には密腺があることなどを知る。
4. 袋の中には何種類の実があるでしょう？	・A4サイズの封筒の中に、ウバメガシの実(どんぐり)、アキグミの実、クスノキの実をそれぞれ2～3個ずつ入れておき、中を見ずに何種類の植物があるかをあてる。どんぐりは硬いがアキグミはやわらかく食べると酸っぱいこと、クスノキはつぶすと樟脳の香りがすることを知る。
5. チーム対抗どんぐりの重さあてゲーム(どんぐりんびっく)	・テーブルごとにチームとなり、手のひらサイズの小石とできるだけ同じ重さになるよう、ウバメガシのどんぐりを紙コップに入れてもらう。各チーム、石とどんぐりの入った紙コップを両手にもちながら、「軽すぎる」「重すぎる」などのコミュニケーションをとり、どんぐりの数を調節する。最も差の小さかったグループにメダルを授与する。

1) この日は雨天であったため、全てのプログラムを室内で実施した。

b. 第2回（2025年11月11日開催）

プログラム	内容
1. クスノキの葉をさわってみよう（室内）	・三行脈の基部のふくらみを指で感じ、そこにダニがいることを想像する。 ・葉をちぎり樟脳の香りを嗅ぐ。
2. においをかいでみよう（室内）	・小さなプラスチック袋に、ハナゾノツクバネウツギの花、バジルの花、ローズマリーの葉、イチョウの実（銀杏）をそれぞれ入れておき、袋を開けてにおいを嗅ぐ。
3. においをかいでみよう（コミュニティ・ガーデン）	・屋外で実際に咲いているハナゾノツクバネウツギの花のにおいを嗅ぐ。
4. コミュニティー・ガーデンの説明（コミュニティ・ガーデン）	・コミュニティ・ガーデンの設立の目的や経緯をきく。グループに分かれて解説をきいたり、自由に散策を行ったりする。
5. ふくろの中身はなんでしょう？（コミュニティ・ガーデン）	・A4サイズの封筒の中に、アカマツの実（まつぼっくり）、イチョウの葉、イロハモミジの葉、ウバメガシの実（どんぐり）、クスノキの小枝を2－3個ずつ入れ、何種入っているかをあてる。長時間立っていることの難しい参加者は、ベンチに座りながら実施する。
6. ビオトープの紹介（コミュニティ・ガーデン）	・環境共生学分野の学生が中心となって管理しているビオトープを紹介する。ビオトープの植物などに触れてもらう。
7. ミミズコンポストの紹介（コミュニティ・ガーデン）	・ミミズを入れることで野菜くずなどを分解するコンポストを紹介する。
8. チーム対抗どんぐりの重さあてゲーム（どんぐりんびっく）（室内）	・テーブルごとにチームをつくってもらい、紙コップ内のまつぼっくりや枝と、できるだけ同じ重さになるよう、ウバメガシのどんぐりを紙コップに入れてもらう。他は第1回と同様に行う。

3. 参加者の声

ネイチャ・フィーリングを実施した後、参加者より主に二つの方法でフィードバックを得ることとした。まず第1回の開催後、学生参加者に任意で100－300字程度の感想の提出を依頼した。この日参加した学生の全てにあたる10名より提出があり、普段と異なる視点で自然に触れることができたこと、盲ろう者に会うことがはじめてで、コミュニケーションの方法や自然

のとらえ方が新鮮に感じられたことなどのコメントがあった。これらの感想は第2回の運営の参考とし、他の参加者らにも共有をした。学生から提出された感想のうち、3名からのコメントを表2に示す。これらは環境共生学分野ホームページ (<https://kankyokyoseilab.net/activities/naturefeeling/> 2026年1月10日確認)においても執筆者の承諾を得て公開されている。

次に、第2回の開催後となる2026年12月1日に、大阪市にある、すまいるの事務所を訪ね、ネイチャ・フィーリングに参加した盲ろう者3名に半構造化インタビューを実施した。インタビューの内容は、①ネイチャ・フィーリング自然「感」察会の感想や印象に残ったこと、②大学にて学生や教員などとネイチャ・フィーリングを実施したことへの印象、③日常での自然とのふれあいの状況、④自然とふれあう際に気をつけていること、⑤今後の企画に関する希望、の5つとした。また、障害の種類や、一度のやりとりでは理解しづらかった内容については、適宜、補足質問を行って、できるだけ多くの情報を得られるようにした。インタビューは4名(佐伯、石田、塚本、中井)で実施し、介助者やすまいるの事務局スタッフ数名に同席してもらい、通訳をしてもらいながら記録した。回答者3名は、2024、2025年の2回とも、ネイチャ・フィーリング自然「感」察会に参加をしていた。従って、回答には、両方の経験をもとに語られた内容が含まれている。障害の程度は、弱視難聴(聴覚と視覚の双方に障害があるが若干、見たり聞いたりすることができる)(2名)と全盲難聴(1名)であった。2回のネイチャ・フィーリングには、それぞれ13～14名の盲ろう者が参加したが、回答者の選定は、すまいるのスタッフにお願いをした。インタビューの時間は一人あたり、30分から40分程であった。このインタビューは、大阪大学大学院人間科学研究科共生学系の倫理委員会より承認を受けて実施した(OUKS25058)。

インタビューでは、3名の回答者がネイチャ・フィーリングにおおむね好意的な印象をもっていることがわかった(表3)。たとえば、ダニ部屋、において、ミミズのコンポストなど新たな発見への言及や、学生や自然観察指導員との交流が楽しかった、自然に触れてうれしかった、など肯定的な感情を示す回答があった。一方で、時間の制約や、他の参加者らとのコミュニケーションが十分にとれなかったという意見もあった。特にコミュニティー・ガー

デンでは、準備されていた全てのメニューを体験することができず、やや消化不良の面があったようである。日常の自然体験については、3名のうち2名が、機会が限られているという回答をしていた。気をつけている点としては、痛みや怪我、アレルギーに言及した回答者が2名あった。今後のネイチャ・フィーリングに対する希望としては、違う場所に行ってみたい、季節を変えて楽しみたい、自然に関する活動をしている人の講演を聞きたい、別の自然について学んだり、ゲームをしたりしたい、といった意見が得られた。

表2 第1回ネイチャ・フィーリング自然「感」察会に参加した
学生の感想(抜粋)。

学年	感想
大学院生	いちようの葉っぱなど、普段から目にしているものでも、こんなに形に集中したことはなかったので新鮮な経験でした。なかなか使わないセンサーをもっと活かしていきたいと思いました。また、聞こえない人が大半を占めて、手話が公用語になっている場合は、私にとって初めてでした。私は手話ができないので「どうコミュニケーションしたらいいか…?!」と勝手にじたばたしている場面もありましたが、おかげさまで良い時間を過ごすことができました。石を回し持ったりしながら、同じ感覚を共有できるのは嬉しいことなんだなと思いました。
学部生	盲ろう者がたくさんいる場に初めて身を置くということはとても貴重な経験でした。ご足労いただき、ともに秋を感じることができたこと、ありがとうございました。通訳がそれぞれの人に対して一斉に行われていること、その情報量に圧倒されたのが一番印象的なことです。「情報を一人ひとりに合った方法でもれなく伝えること」という社会においてまだまだ足りないことですが必要不可欠なことを目の当たりにしたと思います。また、葉っぱや実を触って感じる、ということは小学生ぶりのことで懐かしかったです。みなさまと一緒に体験したことで新しい体験もできたと思います。
学部生	私は今回のネイチャーフィーリングに参加するまで、目と耳の不自由な方とどのようにコミュニケーションをとるのか全く知りませんでした。手はほんの少し触っているだけに見えるのに、通じ合っているのが信頼関係からなのか、長年の経験からなのかはわかりませんでしたがすごいと感じました。同じ班には、耳が聞こえづらいため、介助者の方が状況や先生のお話を耳元で大きく伝えながら参加されている方がいました。誰かの言い間違いや、遠くで誰かが移動していることなど、確かに自分の目で見えてはいないけれどさほど意識していないようなささいなことまで伝えていて、介助者が必要だと思う情報を選び取るのではなく、その場のことを全て伝えることが大切なんだなと感じました。クスノキの樟脳の香りやダニ部屋など、自分がおもしろいと感じたことを共有できたのも嬉しかったです。いいおいというよりは顔をしかめている方もいましたが、このイベントを企画・運営してくださりありがとうございました。とても楽しい日になりました。

表3 盲ろう者を対象としたネイチャア・フィーリングに関する半構造化インタビューの結果の概要。

1) () 内は、著者らにより前後の文脈から補足した内容。

質問	Aさん【弱視難聴】	Bさん【弱視難聴】	Cさん【全盲難聴】
1. ネイチャア・フィーリング自然「感」察会に感服や印象に残ったことなどを教えてください。 2. 大学で、学生や教員を含むいろいろな人たちと一緒に自然体験を行ったことで、何か気づいたことなど、何かがあれば、教えてください。	・植物はいろいろな種類がある。結構、感動が似ている。昔沖縄旅行で触った植物に似ていると思った。 ・セミが枝を産むと聞いてびっくりした。 ・外（コミニニティ・ガーデン）に観察に行ったとき、自然観察指導員の人から、お花や葉っぱのことなど教えてもらった。 ・これまではすまいるだけで行動することが多かった。外部の人が多いからしゃべったが、外部の人は盲ろう者を初めて見た人が多かった。しかし実際に体験してみて盲ろう者とかコミュニケーションしている人もいた。コミュネの機会になっていた。	・「ダニがいる」との語に驚いた。 ・どんぐりの重さのゲーテ面白かった。去年は入れすぎた。今年は軽すぎた。鳥しかっただけ面白かった。 ・雉の声をきいたり、葉っぱを見たりするときはできなかった。アレルギーで触れなさいけれど、においがいろいろあるあったのがよかった。においがあるということも知らなかったの、いろいろあるってびっくりした。 ・たくさん来ていたけど、あまりお話しすることはなかった。 ・学生さんはこの学生なのか、なぜ参加したのか、知れたかった。	・去年は部属の中でゲーテを楽しんだり、植物触ったりして楽しかった。今年は屋外での開催と違い、大の自然に興味を持って出た。自然豊かな感じだった。最初に興味をもったのは鳥の木鹿。説明をきかないまま終わってしまった。納得いくまでできておけばよかった。 ・ピオトーブの土づくりや、何個にも重ねた土や木の葉とかが土にかえっていく自然のサイクルがすごく興味があった。ミミズを使ったり土の作り方や、いろいろな方が興味を持っていた。 ・封筒の中に、木の枝や葉っぱがあり、違いや、かたいやわりかたいを教えてもらったけど、特に関心をもったのはウバメガシ。備忘録になるのは知っていたけど、どんぐりの実がつくのは知らなかった。植物が人の生活の役に立っているところが印象に残った。 ・足元の芝生が気持ちいい。どういった種類の芝生かなんかと思った。 ・山に囲まれた田舎で生まれ育った。自然に触れるのがとてもうれしかった。 ・学生さんから説明してくれたら、自然観察指導員が植物のいるこんなことを説明してくれたらうれしい。交流すること世の中のいろんなことと知ることができる。普段は社会と接する機会が少ない。 ・学生からは若者の考え方、パワーに触れることができる。 ・留学生と話して楽しかった。遠くから日本に勉強しに来られているのは勇気があるしすごいことだなと思う。 ・自然観察指導員の話は、いろいろ話した方が役にたっていく。通訳者が別の盲ろう者の担当してたときに、封筒の中に入っている枯れた方の枝に傷があったその枝にセミの卵があったという話をしていたのも聞きたかった。
3. 日常では、どのような自然、動物や植物などに触れる機会がありますか。	・家の近くに田んぼや畑がけっこうある。寺の近くはすごく大きな木もある。そういうのものは見る機会がある。 ・（そのように家の周りに自然があるのは分かってはいるが、）葉っぱをちめちめにおい噛くという体験は初めて。	・園会はおまじりき。動物はほぼ全部苦手だけど犬は少し触るくらい。 ・散歩はあまりしない。買い物くらい。	・大阪市に住んでいて、最近自然に触れる機会がほしい。すまいるの近くに神社もあるし、公園もある。それがない。自然という感じがほしい。そこで季節の変化を楽しんでいる。 ・動物も、触れる機会は少ない。公園に鳩がいたり、電線に鳩、カラスがいるという説明を受けるといって触れることはない。 ・産経神社、小橋公園、真田山公園に、すまいるの活動終わり、帰りに寄り道しに行っていたが、最近では機会がない。神社とか公園ではないが、休みにでかけたとき、買い物行くときとか、道沿近走する木とか、近くの庭の様子を教えるもらって。週に1回2回くらい。触れるというの少し違う形にはなります。 ・気をつけることは特にない。有毒な植物に触れることがほとんどない。植物にそれほど触れる機会がない。
4. 自然とふれあふ活動を行う際に、気をつけていることはありますか。 5. ネイチャア・フィーリング「感」察会に、もう一度参加するつもり、どんなふうに参加したら、どんなふうに参加したいですか。ご提案などがあれば教えてください。	・葉っぱや木に触るときは強い臭い（手を切るなど）をしないように気をつけている。 ・違う場所に行ってみよう。 ・11月の休みの日、夏はむしわりもある。花は好きなのでその季節の季節で楽しめたらいいと思う。	・アレルギーがあるので、あまり触れないようにしている。 ・痛い、痛いという感覚もある。 ・ミニ講座をしてほしい。自然観察の活動にはどんな人が参加しているのか、どんな活動をしているのか、どういっかきかけで活動しているのかについての話を聞きたい。	・盲ろう者はさまざまな文化とか、さわることで、それが何かを感じたりすることが好き。何かがあることが多く、木の葉や枝にさわるときの感覚。これはどういっか石か、例えば、自然観察会では足元に石があると思う。ごろごろした感じ。これはどういっか石か、見るのが好きなので、触覚で楽しむのも自然観察会かと思う。 ・偏見、偏見。触っていろいろな植物がある。いろいろなあったらいいと思う。ゲームとして触覚をやるのは面白。どれくらい硬いかを体験するの面白。 ・ピオトーブのところ、船の観察ができなかった。ちょっと時間が足りなかった気がする。（制限時間があった）慌てるところがあった。全員でこの植物の説明を受ける、という感じだったからよかったかな。

4. 考察と今後の展望

4.1. ネイチャ・フィーリングがもたらすもの

ネイチャ・フィーリングは、多様な感覚特性をもつ人々が、思い思いに自然を感じとり、その感覚を他者と共有することで相互理解を深められるという特徴をもっている。今回の自然「感」察会においても、視覚への依存を意図的に抑え、触覚や嗅覚、味覚を重視した活動に参加することで、参加者は同じ自然を共に体験しながら、その感じ方の違いに気づく機会を得た。例えばどんぐりの重さ比べでは、見える人よりも盲ろう者のほうが、微細な重量の違いを上手に感じとる様子がみられた。またクスノキの葉にふれる体験では、視覚に障害のある参加者から、葉の表と裏とが識別できるという意見が出された。これを聞き、ほかの参加者が注意深く葉の両面をさわると、ささやかだが確かに質感の違いが存在することに気がついた。こうした出来事は、特定の人のために自然体験を提供するのではなく、誰もが「共に (with)」自然を感じることを重視するネイチャ・フィーリングの基本理念を象徴するものである。さらに視覚や聴覚に障害のない参加者にとっても、日常的な自然認識における視覚優位性を振り返る契機となり、視覚以外の感覚が人と自然との関係性を形成するうえで重要であることを再認識することができた。このことは、自然との直接的で身体性を伴う体験が、人と自然との結びつき、さらには人と人との関係性を深めるうえで重要であるとする環境教育および保全心理学の議論とも整合する(カーソン 1996; Clayton & Myers 2015)。

「いつでも、どこでも、だれでも」というフレーズは、ネイチャ・フィーリングの理念を示すものである。体験の場では、障害の有無や立場、役割といった枠組を一度離れ、私たちはただ自然に好奇心を抱き、自然を感じたいひとりととして同じ時間と空間を共有している。そうした経験は、自然を特別なものとしてではなく、身近で開かれた存在として捉え直すきっかけとなり、参加者それぞれの中に静かに残っていく。ネイチャ・フィーリングは、この小さな気づきや感覚を少しずつ広げることができ、より多くの人にとって自然と向き合う第一歩となる可能性がある。「感」察会に参加した人々の多くは、必ずしも日常から自然と密に関わりをもつ層ではなかったが、大学キャンパ

スでみられる植物が「感」察対象となっていたことで、あらためて周囲の自然環境への関心が喚起されるということも期待される。

4.2. 感覚とコミュニケーションの多様性

今回、盲ろう者を交えてネイチャ・フィーリングを実施できたのは、すまいるのスタッフの支援とコミュニケーション能力の高さに負う面が大きかった。イベントの間、盲ろう者には、介助者が一対一でサポートを行う体制であったが、運営で大きなトラブルは見られず、プログラムを比較的スムーズに進めることができた。自然体験イベントでは、安全面での配慮はもちろん、障害の有無にかかわらず、全ての情報が確実に全員にゆきわたる必要がある。そうした点において、盲ろう者の支援経験の豊富なスタッフらと一緒に自然「感」察会を実施できたことは幸運であった。盲ろう者の支援という仕事は、障害のないものでは気づかない様々な困難を伴うものと想像する。しかし介助を担当していたスタッフらは、とてもなごやかに盲ろう者と接しており、日々の生活から信頼関係が築かれ、共にネイチャ・フィーリングを楽しんでいる印象を受けた。石塚・山崎(2026)(本特集参照)にあるように、盲ろう者のコミュニケーションのあり方は実に多様である。その多様性をつないでいるのが、音声日本語であり、手話である。誰かに向けて発せられたメッセージが、多様な意識や視点を背景にした声やことばによって支えられ、それぞれの受け手へと運ばれていく。私たちは自然「感」察を行う中、まさに、その只中に身を置いていたとも言えることができる。

学生の感想文には、今回掲載しなかったものも含め、ネイチャ・フィーリングによる自然との触れ合いに関する印象だけでなく、その体験を盲ろう者とともに共有したことへの言及がなされていた(表1)。これは、自分と大きく異なる感覚をもつ人々との自然「感」察が、大きなインパクトをもつ経験であったことを示唆している。つまり、我々の「感」察会は、「気がついたら、障害のある方もいた」ではなく、「積極的に障害のある方にも参加をしてもらった」という形であったが、それにより、多様な感じ方と多様なコミュニケーションが交錯する包摂的な空間が創出された。この空間は、言い換えれば、人と自然との接点におけるダイバーシティ&インクルージョンズの間であったと

いえよう。

4.3. 盲ろう者へのインタビューから得た気づき

参加した盲ろう者にインタビューを実施した結果、ネイチュア・フィーリングに対し、総じて好意的な印象をもっていることがわかった（表2）。特に、これからも参加したいという声が得られた点は、著者らにとって純粋にうれしい結果であった。また2名の回答者より、他の参加者らとの交流を肯定的にとらえる意見があった。ネイチュア・フィーリングは、自然を礎とした人と人とのつながりを生みだす効果があること——つまり、「人と自然」だけではなく、「人と人」を結ぶ実践であるということが出来る。

インタビュー対象者の一人(Cさん)は、盲ろう者のもつ感覚を「さわる文化」という独特の言い回しで表現し、今後の企画について積極的に意見を述べられていた（表3）。触覚は、人間が環境を理解するための手段として、重要な感覚の一つであると考ええる。しかし、現代のメディア中心の社会システムでは、徐々に使う機会が減ってきているのかもしれない。また視覚に障害のない人にとっては、必ずしも積極的に利用されない感覚でもあるため、共に触れてみることで、自然から得られる発見や感動の共有につながりやすいのではないだろうか。

今回のインタビューでは、障害の状態や、普段どのような生活を送っているかが、ネイチュア・フィーリングでの感じ方に影響していると考え、普段の生活や障害の状態についてもお聞きした。「盲ろう者」といっても人によって障害の状態やこれまでの経験、考え方などが様々で、自然「感」察会でもそれぞれの感じ方をされていたであろうことが推測された。また「触る」、「においをかぐ」という五感を存分に使う体験や、学生との交流、自然観察指導員からの詳しい説明が、回答者にとって、新たな刺激や発見につながっていたことが示唆された。

今回は弱視難聴と全盲難聴の人にインタビューに答えていただいたが、全盲ろうの人の場合だとまた違った体験になっていたことが予想される。途中で視力や聴力を失った場合は、視力、聴力があった時期の記憶が残っていると考えられるが、初めからそれらが無い場合はどうなのであろうか。また通

訳が情報をどのように伝えるかも、感じ方に影響していたと思われるが、彼らがどのようなことを意識して情報伝達を行っているかまでは知ることができなかった。これらの疑問は、共生学や障害者支援の分野において、重要な研究課題の一つになると考えられる。

日常では、どのような自然、動物や植物などに触れる機会があるか、という問いについては、3名の回答者から、「においを嗅ぐのははじめて」「あまりない」「最近では少ない」などの回答があった。これらのことから、盲ろう者の日常での自然体験は、限られがちであると推測された。特に視覚に障害がある場合は、アレルギーや痛みなどへの漠然とした恐怖などから、積極的に動植物に触れようとする気持ちは起こりづらい可能性がある。いいかえれば、今回の自然「感」察会は、彼らが日常では触れることの難しい自然について、様々な情報や経験を得る機会となっていた。

4.4. 自然との共生の教育と学習の場としてのネイチャ・フィーリング

ここでは、自然との共生に関わる教育と学習の観点から、主催者を「教育者」、参加者を「学習者」と読み替えつつ、2025年の自然「感」察会について考えたい。その際、コミュニティー・ガーデンで実施された活動に着目する。

同活動では、主催者（教育者）としては、参加者（学習者）を2班に分けた上で、前半と後半でそれぞれに同様のプログラムに参加してもらうという（教育的）意図があった。しかしながら実際の活動では、それぞれの参加者が自分たちのペースで自然と触れあっていたため、必ずしも全参加者が全プログラムに参加したわけではなかった。自然の中で参加者が各々の関心とペースで自由に「感」察を進めたことは、学習の観点からすると文字通り自然なことであつたと捉えることもできる。同活動において自由に自然を感じることができるといふ雰囲気が醸成されていたこと自体が、「いま、ここで」の関係性の中で自然との共生について考え、試すうえで重要なことであつたのではないだろうか。少なくとも、今回の活動では、主催者の教育的意図を凌駕する形で、自然との触れ合いの中で参加者の個々の学習が促進されていたことに1つの意義を見出すことができそうである。

そのことを踏まえると、今後は、主催者のプログラムへの参加を希望する

グループと自身の関心で自由に「感」察することを希望するグループに分けて活動を実施するという方法もあるかもしれない。そしてその際、自由な活動(学習)の促進のみならず、主催者の(教育的)働きかけの需要の側面にも注意を向ける必要がある。

今回の活動を通じて実施したインタビューでは、時間不足により、ジオトープなどの説明を受けることができなかったという意見も表明されていた(表3のCさん)。そのような意見を踏まえると、自由さや柔軟性を保ちつつも、主催者側の系統だった説明を希望する参加者には、そのような機会が十分に確保されるようなプログラムの準備と運営が必要ということになる。

自然に関する専門知識の共有という観点からは、主催者以外の「教育者」の存在も重要である。第2回のネイチュア・フィーリング自然「感」察会では、学外から、自然調査や環境教育などに豊富な経験を有する自然観察指導員にも参加いただいた。上述の盲ろう者へのインタビューでは、彼らが花や葉っぱの解説を行い、交流が深められていた様子がうかがえた(表3のAさん)。今後は、主催者以外の「教育者」としての自然観察の専門家などにも広く協力していただきつつ、大学組織の垣根を越えて、多様な人々がつどう場として発展していくための方策について検討することも課題となる。

4.5. 共創に向けて

自然の感じ方の違いを共有し、お互いを知り交流する場を作る上で、参加者が楽しく、また参加したいと思う場をつくっていくことが大切である。著者らは、第2回のネイチュア・フィーリングの後、意見交換会を設け、課題や工夫すべき点について話し合った。まず、自然「感」察会の最中、自然環境に関する情報についてたびたび参加者から質問が寄せられ、中には専門的に勉強している人でないと答えられないものがあつた。運営側は、開催場所の自然環境についてある程度知っている人を複数配置し、必要に応じて事前に打ち合わせを行っておくなどの工夫が考えられる。

次に、視覚や聴覚に障害のある人となない人とで得られる情報に差が出ないよう配慮が必要との意見があつた。見える人、聞こえる人に限定しない説明や、たとえ見えなかったり聞こえなかったりしても、そのことを言語化していく

手段の共有がもとめられる。さらに、障害のある人への基礎的なコミュニケーションの方法を参加者に知ってもらうとよいのではないかとの意見があった。例えば、冒頭の自己紹介では、名前とともに、性別や障害の有無を説明したが、視覚と聴覚に障害のある参加者には、こうした基本的な事項を事前に知らせてから話をはじめるとスムーズである。一方で、あまり気をつかいすぎず、むしろ、わからないことがあったら気軽に質問できる雰囲気も大切だとの指摘があった。スケジュールやプログラムの内容にゆとりをもたせ、よい意味で「余白」を楽しめる自然「感」察会がのぞまれる。

今後の企画については、参加した学生やインタビューを行った盲ろう者の人たちから、様々な提案がなされた。今後、ネイチャ・フィーリングを実施する際には、会場の選択や希望などについて情報共有を行い、「一緒に作り、楽しむ」というプロセスも増やしていきたい。盲ろう者へのインタビューでは、学生や参加者の話をもっと聞きたいという要望があった。これについては、交流重視のイベントを別途企画し、体験重視のネイチャ・フィーリングとバランスをとるなどの方法が考えられる。

今回の自然「感」察会から、ネイチャ・フィーリングは、包摂的な実践にとどまらず、自然との共有体験を通して人々の絆を深める、シンプルでありながら有効なアプローチであることが示された。自然にまつわる驚きや発見は、誰にとっても平等に、しかしそれぞれの感じ方で受け取ることのできるものであってほしい。多様な人々が、共に自然の恵みを享受するためには何が必要か——。人と自然とを巡るそうした根源的な問いに対しても、貴重な学びの場となる可能性をネイチャ・フィーリングは秘めている。

5. 謝辞

開催にあたり、公益財団法人日本自然保護協会、日本自然保護協会自然観察指導員大阪連絡会、ネイチャ・フィーリングをすすめる会の方々には多くのご助言をいただきました。未来共創センターには広報や運営において支援をいただきました。本プロジェクトの一部は、OUマスタープラン実現加速事業、未来共創センター IMPACT オープンプロジェクト「対話で進めるディ

スアビリティ・インクルージョン」、令和7年度大阪大学人間科学部ヒューマン・サイエンス・プロジェクト (HSP)「人と自然との接点におけるダイバーシティ & インクルージョンズ」より助成をいただきました。ご協力くださった全ての皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

阿部治

- 1988 「指導の基礎となる研究 目の不自由な子供は自然をどうみているか」 日本自然保護協会編集・監修『ネイチャ・フィーリング からだの不自由な人たちとの自然観察』平凡社。

内田啓子

- 2023 「自然を見る、感じる、記録する ―ナチュラリスト青柳昌宏のスケッチと軌跡 出品リスト・解説(図録折り込み)。筑波大学自然保護寄附講座。
https://www.nacsj.or.jp/wp/wp-content/uploads/2023/04/20230410__Sketches_and_Life_of_Masahiro_Aoyanagi.pdf (2026年1月11日アクセス)

鳥山由子 編著

- 2007 『視覚障害指導法の理論と実際 ―特別支援教育における視覚障害教育の専門性―』ジアース教育新社。

日本自然保護協会

- 2021 「多様な個性で広がり五感で深める特別な自然観察会 ネイチャ・フィーリング 実践テキスト」日本自然保護協会。

レイチェル カーソン

- 1974 『沈黙の春』(Silent Spring) 青樹繁一訳、新潮社(原著は1962年に発表)。

レイチェル カーソン

- 1996 『センス・オブ・ワンダー』(The Sense of Wonder) 上遠恵子訳、新潮社(原著は1956年に発表)。

Clayton, S., & Myers, G.

- 2015 Conservation psychology: Understanding and promoting human care for nature (2nd ed.). Wiley-Blackwell.

Web サイト

大阪大学大学院人間科学研究科共生学系環境共生学分野

- 2025 「自然「感」察」 <https://kankyokyoiseilab.net/activities/naturefeeling/> (2026/1/10アクセス)